



オリントは個性が際だっている。歴代のカタログには、力強い時計デザインがあふれている。最大公約的なデザインを狙わなかったことが、個性を生むことにつながったように思われる。機能でグイグイ押していく迫力ある時計づくりが個々のモデルに表現されている。



時計の輸入販売についてポケットウオッチの「ガウ」づくり、つまり時計ケースの製造を開始。そこから下巢鴨に工場を開いて置き時計の製作に着手したのは大正時代のことだった。昭和に入ると日野に工場を建設して腕時計づくりを開始する。初期のモデルにはロックスベシヤル、愛国などがあつた。

社名がオリントになってから最初につくられた腕時計にオリントスターがある。中3針ではなく、6時の位置にスモールセコンドがある時計だった。上は初期のころのオリントスターのムーブメント。左は置き時計の部品を組み立てているようす。



・75 歴代のモデル年表。オリントでは過去のモデルを歴史のなかに閉じ込めるのではなく、複製シリーズなどで現在へとつなげている。



【オリント物語】 Photo Courtesy of Orient, WPP Archives

# ORIENT

## グレートブランド物語

Great Brand Story

第39回:文と構成 / 河村喜代子



オリントは東京の上野で1901年に吉田時計店として始まった。最初は外国製の時計を輸入して販売した。写真は初代の名前を受け継いだ二代目の吉田荘五郎。



東洋時計製作所を設立して、輸入販売から時計の製造へ乗り出す。当初は置き時計をつくっていた。その後、会社組織の改編などを経て、オリントの社名が誕生したのは1951年だった。

オリント時計は、外国製の時計を輸入販売する吉田時計店から始まっている。場所は東京上野の繁華街であり、新しいモノが並んだ街である。モノづくりを始めたのは、ムーブメントを入れる時計ケースからで、東洋時計製作所と名前が変わるころには置き時計を製造するようになっていた。同時に輸入販売もつづけており、カタログには当時チソットと呼ばれていたチ

ソヤレオニダス、オメガ、エニカなどのスイス製腕時計がそろっていた。これが大正時代である。昭和に入ると腕時計の製作を開始する。外国の製品が手本だった。そして今、われわれが知るオリントの時計づくりのほとんどは、第2次世界大戦の混乱を乗り越えた1950年以降に行われたものである。そこから20年足らずの1970年に

オリントといえば、この万年カレンダー時計で記憶している人も多い。上のテレビ型のダイヤルスタイルは、この時計が製造された1970年代に新風を送り込んだデザイン。同モデルは近年の複製シリーズにもラインナップされている。下は1960年代に製造されたモデル。オマケでもらう薄いアルミニウム製のカレンダーを時計ベルトに装着していたことを知る世代には、この万年カレンダー時計が登場した当時の驚きも記憶にあるはず。

は、クォーツ時計が登場してくる。出始めこそクォーツ時計は高価だったが、すぐに超低価格製品が大量に出回る。機械式時計は精度と値段でまったく勝負にならなくなった。だがクォーツ時計があったから、オリントという時計ブランドが個性を磨くことにつながったともいえる。クォーツ時計を駆動させるには電池が欠かせないが世界には

電池交換がすぐにはできない時計店があったり、技術者がいる場所だけに時計を使う人が住んでいるわけではない。電池調達すらままならない場所が存在し、機械式時計が必要とされる場所が確実にあった。同時にオリントでは、パワーリザーブを搭載するなどして機械時計の不確かさを解消することもした。

オリントは自分から国産時計メーカーの三男坊であることを認めている。この現実的な覚悟が独自の時計づくりの道を見つけてくれた。こんなに真剣にカレンダーウオッチをつくり、これほど過去のモデルを忘れない時計ブランドもない。それがオリントの個性になっている。



前ページの最後のところに年表形式になった「オリエント時計代表モデルの紹介」を掲載してある。これはオリエントのカタログからの引用である。ここには時計モデルと解説が編年形式でコンパクトに並んでいるので、歴史を振り返るのもってこの資料である。

1951年のオリエントスターから年表は始まっている。中3針の時計ダイナミックが出たのは1955年である。1959年にはロイヤルオリエントがある。この時代は日付け付きのカレンダーオートオリエントが出ている。自動巻きのムーブメントを搭載した時計が出たのは、その翌年1962年のスーパーオートからだ。1960年代は日本が高度成長期に突入していたころである。1964年に開催が決まっていた東京オリンピックは、ひとつのピークだった。東京は高速道路をつくったりと街じゅう毎日、新しいことが生まれてくるようなエネルギーにあふれていた。

レディエース・ダイバーは男性用のキングダイバー1000をそっくりりひとまわり小型にした時計ケースを使う。防水性能は200m。

オリエントの時計にはなじみ深いVパワーリザーブを搭載したMフォース。発売は2000年だった。ワールドタイマーでありながら300mの防水性能を有する。時計が防水することの意味は、実際に水に潜るためだけにあるのではないと宣言しているも同然の画期的な時計だ。

# クオーツ全盛時代になぜ機械式時計なのか？

は機械式腕時計で日差を最小に抑えることが目標だった。国内だけでなく海外メーカーも加わってこの競争が繰り広げられていた。ロイヤルという名前から、オリエントがこめた自信の深さが伝わってくる。1961年に



漫画家の松本零士氏はキングダイバー1000を愛する。「防水1000m」という非日常用のスベックとクッションシェープの時計ケースにまず目を奪われたと語る松本氏。さすがだ。この時計の魅力の源泉をズバリとわづかみにしている。

## キングダイバーで検証!!

1963年に出たオリエントピアオリエントウィークリー。メルセデス針と幅広のブラックベゼルがこの時代のダイバーの潮流をつかまえている。6時の位置に日本語表記のカレンダーがある。半世紀が経過しているとは思えないほど新鮮さにあふれたデザイン。

1964年以降は、多石競争の熱は二気に冷める。時計が使うためのハードな道具になる競争は、別のところで始まっていた。それが1950年代半ばに本格化したダイバーズ時計の開発だ。時計の防水とは、水や水圧から機械を守るための「家」を設計し建築することだ。

それを実現させるのには、魅力あるデザインにするのももちろんだが、道具はつねに機能を追求する。それらを搭載できる合理性が不可欠だ。ダイバーズ時計こそ、時計という道具の実力が試される場になる。オリエントはキングダイバー1000でその答えを出した。

それを実現させるのには、魅力あるデザインにするのももちろんだが、道具はつねに機能を追求する。それらを搭載できる合理性が不可欠だ。ダイバーズ時計こそ、時計という道具の実力が試される場になる。オリエントはキングダイバー1000でその答えを出した。

# 時計の実力を見るバロメータそれはダイバーズ

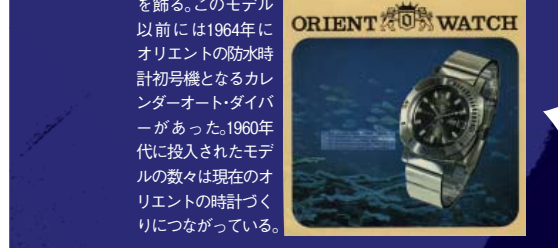
グランプリ100石、64石キングダイバーにつづいてスリーエースが投入された。1965年の広告には「性能のエース、デザインのエース、価格のエースの意味」をこめて3つのAを並べたと解説されている。シンボルマークは二頭のライオンが王冠付きのエンブレムを挟んで向き合う。



スリーエースのキングダイバー1000ではマジックレバー方式を採用した自動巻き、カレンダー機構搭載。そしてO型リングに二重ねじ込み式時計ケースにはテンションリングを使用して防水性を実現していた。



1963年に出たオリエントピアオリエントウィークリー。メルセデス針と幅広のブラックベゼルがこの時代のダイバーの潮流をつかまえている。6時の位置に日本語表記のカレンダーがある。半世紀が経過しているとは思えないほど新鮮さにあふれたデザイン。



1970年の海外向けカタログ。キングダイバー1000が表紙を飾る。このモデル以前には1964年にオリエントの防水時計初号機となるカレンダーオートダイバーがあった。1960年代に投入されたモデルの数々は現在のオリエントの時計づくりにつながっている。

それを腕に装着できるサイズで実現させるのには、魅力あるデザインにするのももちろんだが、道具はつねに機能を追求する。それらを搭載できる合理性が不可欠だ。ダイバーズ時計こそ、時計という道具の実力が試される場になる。オリエントはキングダイバー1000でその答えを出した。

**ORIENT STAR RETRO-FUTURE  
オリエントスター レトロフューチャー**

ホワイトダイヤル WZ0061DK、時計スペックは右と同じ。9時の位置のセミスケルトンの小窓からのぞく機械式ムーブメントの動きが、伝統の時計技術の確かさを演出。逆回転防止機能付き回転ベゼルを装備し、10気圧防水のハイスペックは本格ダイバーズのもの。24石。価格6万8250円

**ORIENT STAR RETRO-FUTURE  
オリエントスター レトロフューチャー**

1950年代のインダストリアルデザインをモチーフにしたシリーズ。ブラックダイヤル WZ0051DK、自動巻きキャリバー40S61、パワーリザーブ、秒針を止められるハック機能搭載。表側のガラスは両球面クリスタルガラス、シースルーバック、10気圧防水。24石。価格6万8250円

**ORIENT STAR GMT  
オリエントスター GMT**

ブラックダイヤル WZ0031DJ、時計スペックは前ページ既出モデルと同様。ステンレススチールの時計ケースにグレーめっきを施す。バンドはカーフ革。複雑になりがちな24時間GMT時計をスタイリッシュに仕上げたところに21世紀の時計づくりに取り組む自負が伝わる。価格9万2400円



**ORIENT STAR RETRO-FUTURE  
オリエントスター レトロフューチャー**

ブラック&ゴールドダイヤル WZ0031DA、自動巻きキャリバー40R52、パワーリザーブ、ハック機能搭載。表側のガラスは両球面クリスタルガラス、シースルーバック、10気圧防水。時計ケースはステンレススチールとピンクゴールド色メッキ、バンドはカーフ革。22石。価格7万3500円

**ORIENT STAR GMT  
オリエントスター GMT**

ホワイトダイヤル WZ0021DJ、時計スペックは右ページ上段2番目の同一モデルのブラックダイヤルと同じ。同シリーズのGMT機能は、風防ガラス内側に取られた回転リングを駆使することで最大3つの異なるタイムゾーンの時間を読み取ることができる。価格8万9250円

**ORIENT STAR SEMI SKELETON  
オリエントスター セミスケルトン**

ホワイトダイヤル WZ0051DA、時計スペックは右ページ最上段の同一モデルのブラックダイヤルと同じ。セミスケルトン窓からのぞく機械式時計の時を刻む動きが、マイクロモスとしての時計の精妙さを伝える。フラットサファイアの硬質で透明度の高いガラスの質感が美しい。価格6万9000円

イタリアの時計デザイナーたちには建築を学んだ経歴を持つ者が多いが、彼らは時計ケースを機械を入れるための建物だという。このことはかつて「ウォッチデザイン」(弊社刊)誌上で取り上げたことがある。今回オリエ

ントの最新モデルを前にして、日本独自の「家」が完成していることを確信した。ここに並ぶモデルには「秘すれば花」に連なる静かな美が流れている。世界に出て行くにふさわしいジャパンスタイルの時計たちだ。



**ORIENT STAR SEMI SKELETON  
オリエントスター セミスケルトン**

ブラックダイヤル WZ0041DA、自動巻きキャリバー40R53、パワーリザーブ、秒針を止められるハック機能搭載。無反射コーティングのサファイアガラス使用、ルミナスライト搭載。ブレスレットはステンレススチール、シースルーバック。22石。価格6万9000円



**ORIENT STAR GMT  
オリエントスター GMT**

ブラックダイヤル WZ0011DJ、自動巻きキャリバー40P50、パワーリザーブ、秒針を止められるハック機能搭載。赤いGMT針と文字盤外周の24時間表示との組み合わせで異なる時間帯の時刻を読み取ることができる。ルミナスライト搭載。シースルーバック。22石。価格8万9250円



**ORIENT FUKKOKU SERIES FLASH  
オリエント復刻シリーズ フラッシュ**

2時の位置にあるボタンを操作すると、ライトがフラッシュする。オリエントでは照明機能付き時計ルミナスを1958年に発表し、1964年にはフラッシュがつづいた。今年2010年に復刻シリーズのなかで、当時、光が走る時計として人気を集めたフラッシュの復刻を実現させた。

**ORIENT FUKKOKU SERIES FLASH  
オリエント復刻シリーズ フラッシュ**

右)ホワイトダイヤル WV0021DL  
左)ブラックダイヤル WV0011DL  
手巻(40時間以上連続駆動)、秒針を止められるハック機能搭載。21石、LED発光機能。3気圧防水。ルミナスライト搭載。クリスタルガラス(表)、バンドはカーフ革。電池寿命約4年(1日約20秒点灯時)。価格3万9900円

オリエントの  
現在から未来が  
見える  
「新作&現行品カタログ」

